子どもの貧困と「心のよりどころ」
―ファミリー・グループホーム「石井ホーム」の事例―

半沢　歩（永野ゼミナール）
HS19-1110C

目次

はじめに
第 1 章　子どもの貧困の現状と課題
　1 節　子どもの貧困とは
　2 節　子どもの貧困の現状
　3 節　国際比較から見る日本の課題
第 2 章　子どもの居場所
　1 節　子どもの居場所とは
　2 節　子どもの居場所づくり
　3 節 子どもの居場所づくりの課題
第 3 章　子どもの社会的養護の歴史と現在
　1 節　社会的養護とは
　2 節　児童養護施設の歴史
　3 節　里親制度の歴史
　4 節　ファミリーホーム・グループホーム
第 4 章　「心のよりどころ」を支えた人からみた子どもの貧困　～横浜市のファミリー・グループホーム「石井ホーム」の事例～
　1 節　調査概要
　2 節　児童福祉にかけた人生
　　2-1　児童福祉にかけた石井氏の人生
　　2-2　石井氏の人生からみる子どもの貧困の変化
　3 節　横浜市「社会福祉法人子どもの園」「石井ホーム」の事例
　4 節　石井ホーム発行「お便り」からの分析
おわりに

はじめに

子どもの貧困をなくすためには、経済格差の対策や労働環境、地域環境の整備など様々な対策が必要である。しかし、格差がなくなり良い環境を整備したとしても、子どもや子どもを育てる人の不安がなくなるわけではなく、心の問題が残ると私は感じる。本論では、子どもの貧困の現状と課題を明らかにし、子どもと子どもの保護者にとって「心のよりどころ」を見つけられる居場所とはどのような場所であるのかについて考察していく。

1　子どもの貧困の現状と課題

厚生労働省の「2019 年度国民生活基礎調査の概況」によると、2018 年の子どもの貧困率は 13.5％で、7 人に 1 人の子どもが貧困であることが明らかになった。これは、OECD 加盟国 34 か国中 10 番目に高く、日本の子どもの貧困問題は海外諸国と比較しても、深刻な状況である。子どもの貧困対策も、日本では子どもや家庭、教育に対しての公的な支出が他国と比べて少なく、財源の増額や支援の見直しが子どもの貧困対策の課題である。

2　子どもの居場所と子どもの社会的養護の歴史と現在

田村光子は、子どもの居場所にとって鍵となるのは、そこに居る子ども自身が「そこに居ていい」と感じる思いであると述べている。(田村,2016)保護者と暮らすことが困難な状況にある家庭の子どもを保護･養育する施設としては、児童養護施設があげられる。児童養護施設は、虐待などで家庭にいることができない等の事情を抱えた子どもたちのシェルター的役割を担っていることは間違いない。だが、大人数の施設が多く、子どもの居場所という点では課題が大きい。近年は、施設養護から家庭養護へ、施設養護のなかでも大規模から小規模へという制度

を拡充する傾向がでてきている。だが、家庭に近い環境で支援の必要な子どもを養護するという本論の課題からみると、まだまだ不十分である。

3　「心のよりどころ」を支えた人からみた子どもの貧困　～横浜市のファミリー・グループホーム「石井ホーム」の事例～

本論では、子どもの「心のよりどころ」となる居場所づくりを実践してきた、石井昇氏(1932 年生,筆者の母方の祖父)への聞き取り調査を中心に、横浜市のファミリー・グループホームである「石井ホーム」の事例を分析し、子どもの貧困と「心のよりどころ」について考察した。石井氏は「子どもは家庭で育つべきだ」という考えを持っていた。家庭環境に近い少人数制のファミリー・グループホーム「石井ホーム」を家庭関係修復や子どもたちの心のケアの場として 1987 年から 2005 年までの約 18 年間運営した。石井ホームでは、離婚や再婚、保護者の入院などで家庭に居場所のない子どもや非行や、不登校などの社会不適応の子ども(中高生)2-6 名が入所し、石井氏と妻、長男、次男、長女(筆者の母)、妻の母の実家族最大時 6 名と一緒に生活していた。石井ホームの主な方針は 3 つで、1 つ目は主に青少年(中高生)を受け入れること、2 つ目は教会へ通うこと、3 つ目は食事を一緒にするという方針であった。これらの方針から、家庭と同じような環境で子どもを養育することや子どもの心のケアを重要視していたことがわかる。本論では、幼少期に戦争を体験し、クリスチャンとなり、後に妻となる女性とともに、公園で日曜学校を開くなかで、戦後の子どもたちの貧困の現実を目の当たりにし、児童福祉を生涯の仕事とするに至るまでの石井氏の人生を分析した。また、石井氏のヒアリングや石井ホームが発行する「お便り」から、運営者の理念や葛藤と同時に、家族や大人と過ごす経験が少ない子どもたちがいる現実が明らかになった。そのような経験が少ない子どもたちは、進学の機会や家族旅行など多くの子どもたちが「当たり前」としている経験をもつことが難しい。このことは、周りと喜びを分かち合うことや家族団らんなどの精神面でも「当たり前」とされる経験をもつことの困難を語っている。これらのことから、家庭や家庭に近い環境は子どもにとって大切な「心のよりどころ」であることが示された。石井ホームの事例から、子どもが抱える問題や不安に、大人が他人事ではなくどれだけ自分事として関わることができるのかが、子どもの「心のよりどころ」につながることが明らかにされた。

おわりに

子どもが安心できる「心のよりどころ」となる居場所は子どもが安心だと感じて過ごすことができる決まった空間や時間を、子どものことを自分事としてとらえ、楽しむことができる大人と過ごす場所であると考えられる。この大人は子どもの実の親であることが望ましい。だが、実の親がいつでもそのような存在でいられるとは限らない。そのときは、実の親に代わり子どもと子どもの保護者にとって「心のよりどころ」となる居場所を社会的に提供する必要がある。そのような居場所づくりには、子どもの問題を他人事ではなく自分事としてとらえ、見守り、社会全体で育てていこうとする意識づくりや仕組みづくりが何よりも必要である。

主要参考文献

阿部彩,2008,『子どもの貧困－日本の不公平を考える』岩波書店.

阿部彩,2014,『子どもの貧困Ⅱ―解決策を考える』岩波書店.

田村光子,2016,「子どもの居場所の機能の検討」『植草学園短期大学研究紀要』第 17 号 31～42 頁.

吉田幸恵,2018,『社会的養護の歴史的変遷』ミネルヴァ書房.